玉置　都華

略歴

2016 年
北海道大学 農学部 卒業

2016 年 9 月~ 2018 年 8 月
Wageningen University International Land and Water Management 修了

ワーゲニンゲン大学大学院を 2018 年 8 月 30 日に卒業し、11 月 1 日から新社会人として仕事を始めるため 10 月に日本に戻ってきました。北海道には 2 年ぶりに帰ってきて、到着まではドキドキしていましたが、新千歳空港ではおなじみの景色が広がっていました。私自身の忘備録として、そして今後海外でインターンシップをする学生がいたときの参考になればと思い、またまたインターンシップ、大学院卒業、海外での就活について寄稿文を書かせていただきます。

ワーゲニンゲン大学のインターンシップ要件

ワーゲニンゲン大学の卒業要件には、最低 4 か月のインターンシップ（＝24 単位）が含まれています。インターンシップの代わりにマイナー論文を書く選択も可能でした。一口にインターンシップといってもさまざまあり、各企業がホームページ上で集めるもの、NGO が実施しているもの、研究の手伝い、農業の実務など、インターンシップを通して成し遂げたいものと、自身の選考がマッチしていることを指導教官に納得させることができればインターンシップとしてみなしてくれます。

インターンシップを見つけるまで

私はインターンシップの経験がないことと、せっかくなら社会人になる前に会社で働く経験をしてみたかったので、企業が募集するインターンシップを探すことに決めました。インターンシップは完全に自分で見つける必要があり、インドネシアにいた 2017 年 11 月ごろには、どこに応募しようか考え始めていました（企業によっては開始半年前にはすでに締め切っている、応募条件などが異なるため）。友人の中には、2017 年 11 月の時点で翌年 3 月から始める大企業でのインターンシップが決定している子もいました。主に、Jos's Water job というサイトをオランダ人に紹介してもらい、よく見ていました。また UN careers や各企業のウェブサイトのリンクなどをひたすらブックマークし情報を集めていました。さまざまな企業や組織がインターンシップの機会を設けており、有給・無給の違いや、労働時間の違い、国や地域もバラバラであり、選択肢が多くありました。

なかなかインターンシップが決まらず、焦っていた 2018 年 1 月下旬に、国際泥炭地学会のオランダ支部にインターンシップを探しているとの旨メールを送りました。（今考えると恥ずかしいのですが、当時は国際学会だと知らず、インターンシップの募集もしていませんでした。）それでも快く私の志望動機と CV（履歴書）を学会のネットワークを伝って転送してくださり、2 月上旬に突然、「明日スキポール空港で面接します！」とメールが来ました。その当時は再試の勉強と、論文の執筆で精神的にやられていて、電車で往復 3 時間かかるスキポールまでわざわざいくことに一瞬ためらいましたが、これも経験だと思い、面接に向かいました。待ち合わせのホテルではなぜかインターネットがつながらず、面接できなかったらどうしようという恐怖にかられましたが、面接相手の方が「君が Satoka かな？」と声をかけてくれたのでホッとしたのを覚えています。そのあとホテルのバーでミントティーやコーヒーを飲みながら自己紹介をし合い、現在国際泥炭地学会が取り組んでいること、インターンシップができるプロジェクトの可能性について説明していただきました。また、もしインターンシップが決まればドイツのミュンスターに行くという予想外なことも言い渡され、ドイツに行くのだろうかと当時は半信半疑でした（面接していただいたオランダ人とドイ

avaxhome.wsより改変

ツ人の方には、まだプロジェクトが採択されていないから期待しないでねと言われたので、期待しないようにしていました）。面接から 10 日後、国際泥炭地学会の方から「プロジェクトが採択されたよ！」と連絡があり、4 月からドイツでのインターンが決まりました。

私が、最終的に応募したのは FAO（The Food and Agriculture Organization of the United Nations ）、ILO （International Labour Organization）、UNWater （United Nations Water）、WWF （World Wildlife Fund for Nature）、そして今回インターンシップの機会をいただけた国際泥炭地学会です。友人が国際機関でインターンシップをしていた話を聞いて純粋にかっこいいなと思い、「自分も国際組織に入って中を見てみたい！」と思って応募しましたが、やはり狭き門でした。今思うと、そこで何を実現したいのかが曖昧だったため通らなかったのは当然でした。ちなみに国際機関は候補者に選ばれないと連絡が来ない仕組みで、WWF も応募した 3 か月後に連絡がきたときは、今更！？となったのを覚えています。ただ、応募するなかで CV や、カバーレターの書き方を学べ、ネイティブの友人に内容を見てもらい、オフィシャルな表現や言葉の言い回しを学べたのは良い経験でしたし、その後のアクションにつながりました。インターンシップの獲得方法は本当に様々ですが、私の方法も一つの例として考えていただければと思います。

怒涛の 3 月

インターンシップが決まり、やっと 100%論文に集中できると思ったのですが、国が変わればビザや滞在許可についての準備が必要なので、論文と並行して調べ、また、Erasmus という EU の奨学金に応募できることが分かり、その書類準備を始めました。さらに、住まい探しとサブレント（自分が不在の時、現在住んでいる部屋をほかの人に貸すことが許されています）の手続きなどをし、3 月は猛烈な忙しさでした。Gaia という建物の一階でいつも一人で論文を書き、かつ集中できなくなると、ほかの雑務をしてまた論文に戻るという落ち着かない日々で、毎日 1 杯カプチーノを飲んでいました。ありがたいことにその時期北大の友人が二人も卒業旅行でオランダに遊びに来てくれたのですが、思い切って遊べず申し訳なかった記憶があります。また、外の寒さに体力的・精神的にもやられていました。

2 月下旬は会社の見学のために片道 3 時間かけて日帰りでミュンスターに行き、最寄り駅についたのは良かったのですが、その先の会社までの行き方をちゃんと調べておらず、近くのホテルのオーナーが車で連れて行ってくださったことは忘れられません。隣の国とはいえ、ドイツとオランダでは建物の雰囲気や人の感じが全然違う印象でした。修論発表会が 3 月 22 日に終わってまもなく、次の日にはインターンシップの指導教官と話し合い、計画書の提出を求められ、土日に奨学金関係の書類を片付け、引っ越しの片づけをはじめ、友人の結婚報告パーティーに行き、遂にドイツへ向かいました。

ビザについて

インターンシップはヨーロッパで非常に盛んですが、EU 圏外の国籍の場合、就労ビザの申し込み等が必要になるという噂を聞いていたので、在オランダドイツ大使館に問い合わせをしました。すると日本国籍であれば、直接移民局に行って滞在許可証を発行するだけで就労ビザは必要ないといわれました。ドイツでインターンした中国人の友達は、在オランダドイツ大使館に出向いて各種書類の提出をしていましたが、日本国籍というだけで一部の手続きを省くことができたのは、大きな違いでした。（ただし、ルールは常に変化していますのであくまでも当時の例になります。）ミュンスターの移民局はとても混んでおり、事前にウェブサイトから予約することで（ドイツ語のみですが）待ち時間を大幅に省くことができました。ドイツは移民の受け入れが盛んな分、連日手続きなどで長蛇の列になっているようです。

奨学金

先ほども述べたように、EU 圏内では Erasmus と呼ばれる奨学金があり、EU 圏の学生であれば EU 出資の奨学金を利用して他の EU 国に行くことが推奨されています。この Erasmus の奨学金の中に Erasmus+mobility というものがあり、これは主にインターンシップのために利用できる奨学金で、EU の大学に所属している留学生も応募の対象になります。金額は行き先の国や期間によって異なりますが、私は運よく？合計 1800 ユーロをいただくことができました。書類の準備が必要ですが、生活費の足しになったため、ありがたかったです。

ドイツ北西部の街：ミュンスター

ミュンスターは人口約 30 万人の街で、世界で最も住みやすい都市 1 位に選ばれたことのあるエコな都市です。比較的富裕層が住んでいる都市ということで、かなり落ち着いた街という印象でした。山が多いドイツの中では珍しく平地が多いことから、自転車専用道路が整備されサイクリングがしやすく、毎日たくさんのサイクリストとすれ違っていました。バスや列車にも自転車用のチケットを一緒に買えば自転車を持ち込むことができてしまいます。ミュンスターは音楽と医学が有名で、病院が多く、街ではストリートパフォーマーをよく見かけました。学生が比較的多く、人種も多種多様です。ミュンスターとお隣のオスナブルクは 33 年戦争の平和条約の締結地としても知られています。主要なスーパーは REWE、LIDL、ALDI、EDEKA で、ミュンスターは水曜日と土曜日に街の中心でマーケットがやっていました。ショッピングは私にとっては十分だと思いましたが、ドルトムントやエッセン、デュッセルドルフに電車で行ける距離なので、しっかり買い物をしたい人はより大きな町に行っているようでした。Send という催しが年 4 回あり、街の中心に遊園地が一時的に出現し、食べ物屋さんやお土産屋さんも立ち並んでいました

会社の雰囲気

国際泥炭地学会を通してご縁をいただいた学会員の方はドイツ人で、環境や、都市計画に関するコンサルティング業務を行う会社を営む社長であり、その会社内にデスクをもらいインターンシップをさせていただきました。総勢 16 人という小さな会社で、ドイツ人と、ドイツ語が堪能なバングラシュの女性が一人という構成でインターンシップ生は私一人だけでした。一緒にフィールドワークに連れて行ってもらったり、植生の写真を見せてもらったり、地理情報システムのことを教えてもらうなど、みなさんとてもいい人でたくさん助けていただきました。お昼はキッチンで作ったり、持参したお弁当を温めたり、近くのケバブ屋さんやハンバーガー屋さん、パン屋さんで買うこともありました。エアコンがないので（ドイツは全土でエアコンの設置はしていないようです）、夏は暑くて大変でしたが、同僚の人と疲れたときにおしゃべりしたり、近くの公園に散歩に行ったり、一緒に自転車で帰ったりしたのは良い思い出です。

インターンシップの内容

インターンシップのプロジェクトのテーマは泥炭掘削量の現状と将来予測、掘削可能場所の認識という複雑なテーマでした。主に文献を読んで、情報を集めて、各国の peat association（国際泥炭地学会のことで、世界 41 か国の泥炭関連の研究者、企業、学生、NGO など約 1500 人による組織です）にメールでアンケートを取り、集めたデータを可視化して分析する、地理情報システムを使って衛星画像から放棄された泥炭地を探す、などなど多岐にわたっていました。GIS の知識がなかったので ArcGIS や Google earth のチュートリアルで勉強し、本やネット上の論文を読み漁りました。実際に泥炭地を見に、ドイツの北部へ連れて行ってもらい、アイルランドにも行き専門家の方に 1 日泥炭地巡りをさせていただき、泥炭付けの半年を過ごせたことはとても楽しかったです。

インターンシップの締めくくりとして、国際泥炭地学会のシンポジウムでの発表がありました。会場

avaxhome.wsより改変

はオランダのロッテルダムにある客船内で、世界中の国際泥炭地学会員が集合しました。このシンポジウムは国際泥炭地学会の 50 周年を祝う記念イベントとして開催され、3 日間にわたって、泥炭に関する最新の研究が発表され、パネルディスカッションがあったり、小旅行があったり、意見交換会が行われていました。泥炭に関して、環境 NGO、政府、企業、研究者などさまざまなセクターが興味を示しており、この国際泥炭地学会はまれにみる多様性のある学会だそうです。長い人は学会員歴 30 年であり、シンポジウムは若干老人会に参加したような気分にもなりましたが、皆さんいい方々で、今年加入したばかりの私にも話しかけてくださりとてもありがたかったです。シンポジウムはとても豪華で、夜はディナーを食べて、マジシャンが来たり、歌手が生歌を披露したり、夜はホテルに戻る際に water taxi を利用し、ロッテルダムの港のクルーズツアーをしてもらうなど、感動の連続でした。私はプレゼンをしなかったのですが、指導教官が私のデータをさらに見やすくしてくれたものを発表していた時は感無量でした。インターン中にメールを出して返信をくれた方々とシンポジウムの場で直接お話しできたことも楽しかったです。

このプロジェクトを通して、世界各国の泥炭専門家の意見を聞き、国ごとに泥炭の扱い方への違いがあり、それが政策に反映されていて、泥炭に対する認識の多様さや、泥炭地の掘削が環境に与える影響など、さまざまなことが学べました。対象国が 20 か国ほどあり、ウェブサイトや資料の内容が全く分からないときは Google 翻訳に大変お世話になっていました。

指導教官は大学側と会社側の二人でしたが、今思えばもっとサポートをお願いしてもよかったのかなと思います。当時はわからないことを一生懸命聞いていたつもりでしたが、要領が悪かった気がします。また、扱うデータの単位が異なることから、正しく数値を変換しないと結果が変わってしまったため、今後は同じミスをしないようにしようと心に決めた経験となりました。

住まい

ドイツでは学生のシェアハウスが一般的で、WG-Gesucht.de(Wohngemeinschaft) というウェブサイトでドイツ全国のシェアハウスの空き家を探すことができます。私は会社から近く、できるだけ安い部屋という条件で、連絡フォームを通して入居希望を 10 件ほど送ったのですが、当時論文を仕上げる中でドイツにいく余裕がなく、ミュンスターでの対面インタビューを要求されたことから、なかなか決定しませんでした。3 月中旬に、再度空き家を確認したところ、立地がよく、部屋が綺麗でなんとすべて込み込み月 200 ユーロというミラクルな部屋を見つけ早速連絡しました。その家はドイツ人男性二人とシェアすることになっていて、さすがに安すぎるとは思ったのですが、メールの返信が丁寧でかつ二人とも英語を話せる、さらに Skype での面接を唯一快諾してくれました。二人とも年上で、第一印象は少し怖い感じで、自分なりに一生懸命自己紹介しましたが、面接が終わった後は選ばれなかったかもと思いました。が、3 時間後に「You are in!」という連絡をもらえた時は信じられませんでしたが、住む場所が見つかったことにとても安心したのを覚えています。そもそも入居に面接があるのも面白いですが、一緒に住むからこそ事前に相手を知ったうえで決めるというのはよくあるようです。4 月 1 日にスーツケースとリュックに最小限のものを詰めて、ミュンスターに引っ越しました。駅ではハウスメイトの一人が迎えに来てくれ、とてもありがたかったです。家は閑静な住宅街に位置しており、目の前には公園があり、緑がいっぱいでうさぎもいました。部屋もウェブサイトで見た通りとてもきれいで整頓されて、ユニークなインテアでまとめられ、掃除のルールと当番も決められていました。一通りハウスルールを説明してもらった後はハウスメイト 2 人と私で近くのケバブ屋さんに行きご飯を食べ、改めて自己紹介をしました。ドイツは日曜日にスーパーマーケットが完全にしまっているので、食料の調達は日曜日以外にする重要性を初日に学びました。ドイツ人は英語を話せる人は多いですが、オランダ人のほ

うが流暢です。あるとき英語で話しかけると、ドイツ語でないと対応しないと突っぱね返されたこともあり、ドイツ人はドイツ語に誇りをもっている印象です。そのこともあり、英語を流暢に話せるハウスメイトがいることで、現地の書類関係を助けてもらったり、英語のレポートを見てもらったり、友達を紹介してもらえてさらにネットワークも広がったので、心強かったです。異国でのシェアハウスはおすすめです！

交通手段

ドイツの交通費は高いです（バス料金は 15 ㎞で片道 5.1 ユーロ）。家から会社までは、自転車通勤が一番確実で安く、運動になると思い、スポーツバイクとヘルメットと手袋を購入し、半年間毎日片道13ｋｍ自転車をこいで通勤していました。2018 年は気候変動のためかとても暖かい晴れた日が続いたおかげで？、雨が多いことで有名なミュンスターでもほぼ毎日快適な自転車通勤ライフが送れました。

ドイツで学ぶ学生であれば、基本的に在籍大学の所在都市内は無料（ゼメスターチケットという名前のチケットを発行されます）、また州内は regional train（普通列車）なら電車も無料というなんともうらやましい待遇が受けられます。（ゼメスターチケットを持っている学生は、土日祝日とその他指定時間内は同行人 1 人であれば一緒に無料で乗車できるため、良く一緒に乗せさせてもらいました）。

ドイツ国内を移動するときは DB（DeutcheBahn）のサイトから事前に買う、regional ticket などのお得な切符を買う、flixbus から激安なバスチケットを買う、そして私は結局使いませんでしたが blablacar というカーシェアリングを使うことで安く抑えられます。ドイツの列車の駅には改札ゲートがなく、切符を車内で駅員さんに見せるシステムでした。無賃乗車は罰金 60 ユーロなので、確認されることがない場合があっても必ずチケットは買う必要があります。電車の中でプレッツェルや水をもらえることがありました！また電源プラグ付き、WiFi が飛んでいる電車も多いです。しかし、ドイツの列車はよく遅れるため、日本の交通機関が 10 秒早く到着しただけで謝ったニュースはとても有名でした。

ドイツ人とオランダ人

今となってはとても失礼なのですが、はじめはお隣の国同士オランダとドイツはあまり違いがないと思っていました。ドイツ語とオランダ語は英語と同じ語源なのでかなり似ている印象でしたが、実際文法に深く踏み込むとやはり全く違う言語のようです。ドイツ人のほうが母国語にプライドを持っていて、それは留学生がドイツ語の試験を受け続けないと在学資格がなくなるといったような仕組みによく反映されている気がしました。オランダ人は英語がペラペラ話せて、すでに 1 年住んでいたこともあり、英語が基本的にどこでも通じてフレンドリーな人が多い印象でしたが、ドイツは、冷たいし英語が通じるところが少ないと思っていました。しかし、ハウスメイトを含め、時間をかけて親しくなればなるほど温かい人たちでした。そのため、オランダ語もドイツ語も少々かじったのですが、ドイツ語のほうが勉強するモチベーションが高かったです。オランダは PIN と呼ばれるデビットカード払いが主流でしたが、ドイツは、現金払いが多かったです。オランダはカラフルでかわいい（駅は黄色と青のテーマカラー、スーパーマーケットもポップな色が多い）、ドイツは赤黒灰色で荘厳（駅は赤と白のテーマカラー、寒色系の色が多い）な感じがしました。また、私の友人だけかもしれませんが、距離的にはとても近いのに、ドイツ人もオランダ人も意外とお互いの国に行っていない人が多く、旅行先は暖かいスペインやイタリアが多いようです。個人主義、自立しているところはどちらの国でも似ている気がしました。

ドイツ料理

ドイツはケーキが大きくて安くておいしくて、特にアップルタルト（Apfelkuchen）、黒い森のケーキ (Schawarzkochen) 、チーズケーキ (käsekuchen)が好きでよく食べていました。ビー

ル（bier）とソーセージ（bratwurst）とポテト（pommes mit mayo）は期待を裏切らず本当に最高の組み合わせでした。ハウスメイトと公園でバーベキューをしたのですが、毎回太いソーセージと一緒に硬いパンをザワークラウト（Sauerkraut）と一緒に挟んで食べ、ドはまりしました。クワーク（kwark）というギリシャヨーグルトのようなドイツ生まれの濃厚なチーズがおいしくて朝ごはんによく食べました。また、トルコ系やイタリア系の商人がいた歴史から、トルコ料理（ケバブ、トルティーヤピザ）やイタリア料理（vapiano というチェーンレストランは安くてよく行きました）、ギリシャ料理（ギュロス）はおいしかったです。外食は日本とほぼ同じくらいの価格帯で、ケバブ系はすこし安めでした。飲酒運転は規定量以下であれば許可されていることには驚きでした。

インターンシップの評価

インターンシップの内容は研究プロジェクトだったので、レポートはほぼ論文と同じレイアウト＋インターンを通して学んだことを書く reflection の二部の約 40 ページで構成しました。ライティングはまだまだでしたが、貢献度の評価で 10 段階中 9.5 をもらえたことはとてもうれしかったです。

大学院の卒業式

ワーゲニンゲン大学の卒業のタイミングは学生によって異なります。120ECT（ヨーロッパの大学の単位）取得した時点で卒業確定となります。私は 8 月 30 日にすべての成績がシステムに入力されたので、担当者から「All your marks are in the system, so today is your graduation day, congratulations!」というメールが来て卒業の通知となり、その時は全身の力が抜けました。卒業式はプログラムごとに実施され、私のプログラムの日程は 9 月 28 日 15 時からでした。卒業式は自由な服装でよいので、私は日本らしさをアピールしようと、浴衣を着ていきました。ほかの卒業生も伝統衣装を着ていたり、ドレスだったり、私服の人もいました。入場前に部屋で待機し、名前を呼ばれ整列し、つえを持った人に付いて入場しました。言語はオランダ語と英語で交互に読み上げられていたのが印象的です。卒業のメッセージのあとは、出席している学生の名前が一人ずつ呼ばれ、呼ばれた学生は壇上にあがり修了証書にサインをし、思い出のスピーチが読み上げられました。この読み上げられるスピーチの言語も事前にアンケートで英語かオランダ語が聞かれました。スピーチの後は修了証書と記念品のピンが渡され、席に戻ります。大体 2 時間の行程でした。日本の大学の卒業式と比べると、時間が短くあっさりしているような気もしましたが、しっかりポイントを抑えた効率的な卒業式だったとも思います。退場した後は、会場の隣にあるホテルでドリンクと軽食が用意されていました。すでに国に帰ってしまった同級生は参加できず、私のプログラムの専攻からは私一人だけだったため少し寂しかったですが、ほかの専攻の友達が数人参加していたのと、まだ卒業していない友人が参加してくれたことがうれしかったです。

就活について

就職活動もインターンシップが始まった 4 月ごろから視野に入れ始めていました。というのも、4 月の時点では、やっと論文の口頭発表が終わり、ドイツに引っ越してきたばかりなのにも関わらず、日本の大学生の就活解禁の話も耳にしていたので、日本に帰国するとした場合スケジュールに乗る必要があると考えていたためです。ただ、当時は日本に帰りたいのか、ヨーロッパに残りたいのか、それとも別の場所にまた行くのか全く分かっていませんでした。4 月中旬にロンドンでキャリアフォーラムがあったので、とりあえず興味のある企業にエントリーシートを出し参加しました。（今思い返せば経験ではありましたが、無理して参加しなくてもよかったのかもしれません笑。証明写真や、スーツなどの準備が大変かつ、応募した企業への情熱が足りなかった。）オランダやドイツでは卒業してから就活を始めることが一般的なようで、まだ学生のうちに仕事を探すことは早すぎるといわれたことがありました。ただ、

avaxhome.wsより改変

私の場合奨学金なしで留学に来ているため卒業後すぐに働き始めたく、いろいろなシナリオを考えながらもかなり混乱していました。4 月のロンドンキャリアフォーラムでは農業や水管理と全く関係ない企業 2 社と面接をし、最終面接まで進めさせていただきましたが、面接官の方に、わが社で本当にいいのか？と念を押されて、やっぱり自分は専門分野を生かせる仕事をしたいことに気が付き、しばらく就活をやめていました。7 月上旬にいろいろな方に相談する中で一人の先輩が、ご自身の在籍する会社を紹介して下さり、これから新しいことをどんどんやっていこうとしている会社ということで、先輩の力を借りながら履歴書を準備しました。すぐに一次面接の日程が決まり、二次面接に進めることになり、最終面接の 8 月 29 日の当日中に内定のメールをいただき、就職先が決まりました。この会社はすべての面接を Skype で実施してくださり、11 月から入社を調整していただけたことも貴重でした。現在はこの会社でスマート農業の推進にかかわる仕事をしています！

私が日本に帰国して働くと決めたのにはいくつか理由はありますが、海外で仕事をする意味を見いだすより、日本で働くことを経験したい気持ちが強かったからです。海外で仕事することは、言葉の違いはもちろん文化が違うことから、私はまず日本に戻り、日本文化の中で農業をもっと知る必要があると感じました。海外で日本の就活に参加するのはエントリーシートを郵送する場合や、最終面接は日本で実施する場合は、なかなか難しく感じました。CFN のキャリアフォーラムに参加する、遠隔で対応してもらう、外資や海外拠点がある会社であれば現地の事務局と連絡を取るなどが挙げられると思います。

大学院留学を終えて

いろいろなこと経て実現したワーゲニンゲン大学への大学院留学でしたが、本当に留学してよかったです。世界中の人に出会い、多様な価値観に触れ、まだまだ人生これから、自分がしたいことを自分らしくやるべきだと励まされました。授業の再試に何度も落ち、論文がうまくまとめられず、ライティングで足を引っ張り、インターンシップが決まらず夜も眠れず、友人がキラキラして劣等感を感じる場面などつらいこともありました。しかし、スタディアドバイザーのオランダ人の女性は、普段はクールですが、本当につらくて悩んだときはとても親身になって話を聞いてくれて励ましてくれました。グループワークでしんどくなった時は先生が声をかけてくれました。道行く人に助けられて目的地に着いたり、買い物の接客をしてくれた人と友達になったり、なによりも留学先、日本の友達、そして家族に支えられました。マリファナのにおいがわかるようになったり、ヨーロピアンジョークで少し笑えるようになったり、クラブでダンスをしたり、月を見たり、砂浜に寝そべって語り合ったり、ヨガをしたり、料理をしたりと、本当に想像のできなかった 2 年間でした。

周りの方のサポートがあったからこそ、卒業することができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。当たり前ですが、留学が終わってもまだまだこれからの人生は続いてきます笑。帰国して改めて日本を懐かしく思うともに、環境が変わっても自分は自分であり、まだまだ学び続ける必要性を感じています。今後は留学で得たことを日々取り入れながら、ビジネス英語を鍛え、また新たな環境で仕事を頑張ります！

ここまでの長文を読んでいただきありがとうございました！！！